

【第 42 回 世界新体操選手権大会 個人総合予選】

開催日：2026 年 8 月 12 日～16 日

開催地：ドイツ・フランクフルト

会場：Festhalle Frankfurt

第 42 回世界新体操選手権大会が、ドイツ・フランクフルトにて開催されている。本大会には、世界 73 か国から個人 93 名、団体 42 か国が出場し、世界各国のトップ選手が集結する今シーズン最大の大会となる。

また、本大会は、2028 年ロサンゼルスオリンピックに向けた最初の予選大会として位置づけられており、ここからオリンピック出場枠獲得に向けた戦いが始まる。

8 月 12 日、13 日の 2 日間にわたり個人総合予選が行われ、日本からは鈴木菜巴選手、喜田未来乃選手が出場した。個人総合予選は、4 種目のうちベストスコア 3 種目の合計得点による上位 18 名が個人総合決勝へ進出する。さらに、個人総合決勝（4 種目合計）の上位 3 選手が、それぞれ所属する NOC にロサンゼルスオリンピックの出場枠 1 枠をもたらす。

鈴木選手、喜田選手ともに、今シーズンはワールドカップシリーズを通して国際舞台での経験を重ね、それぞれの課題と向き合いながら、演技構成や難度、実施の精度を高めてきた。世界最高峰の選手が集う中、これまで積み重ねてきた力を 4 種目でどこまで発揮できるかが問われる大会となった。

個人競技に続き、8 月 15 日には団体総合が行われる。ボール 5、フープ 3・クラブ 2 の 2 種目の合計得点によって順位が決定し、上位 3 か国がロサンゼルスオリンピックの出場枠を獲得する。

ロサンゼルスオリンピックの出場枠を獲得することは、日本チームにとって大きな目標である。しかし、その結果だけに意識を向けるのではなく、これまで積み重ねてきた自分たちの演技にこだわり、一つひとつを正しく、力強く、自信を持ってやり切ることが何よりも重要となる。

世界選手権という大舞台であっても、やるべきことは変わらない。目の前の一つひとつに集中し、自分たちがやってきたことを信じ、自分たちらしい演技を最後まで貫く。その先に結果がついてくると信じ、持てる力のすべてを出し切る大会としたい。

個人総合予選

【喜田未来乃】

3 種目合計 22 位

〈クラブ〉

合計 26.550 点 (DB7.8/DA3.3/A7.7/E7.15)

世界選手権最初の種目となったクラブは、緊張からやや身体に硬さが見られ、スケールバランスでは上半身が高く、十分な静止を見せることができなかった。

ステップ前の DA では、クラブの回転が予定より多くなり、キャッチが非常に難しい状況となったが、最後まで手具を見て対応し、落下することなく次の動きにつなげることができた。一方で、DA としては認められず、その後の動きにも乱れが生じ、ステップも十分な長さを確保することができなかった。

パンシェターンでは、勢いのある状態で難度に入ったことで上半身と下半身のリズムが合わず、十分にフォームを作ることができなかった。練習では精度を高めていただけに、本番で本来の回転数や形を見せることができなかったことが悔やまれる。

細かな取りこぼしはあったものの、これまでミスにつながることの多かったリスクを本番ではよくコントロールし、最後まで大きく崩れることなく演技をまとめることができた。世界選手権という大舞台で、最初の種目を粘り強くやり切れたことは、次の種目につながる内容となった。

〈リボン〉

合計 26.600 点 (DB7.1/DA3.9/A8.0/E7.6)

クラブ終了後、一度身体が緩んだ様子も見られたが、本番ではしっかりと集中力を高め、リボンと身体の動きを合わせながら、ダイナミックに思い切った演技をすることができた。

ブーメランでは、1 つ目の引き戻しがやや不足し、2 つ目のスケールバランスと組み合わせたブーメランでは投げの方向がずれたことで、キャッチからその後の動きにわずかな乱れが生じた。

一方で、投げ受けは大きなミスなく実施することができ、演技全体にもこれまで取り組んできたダイナミックさが表れてきた。芸術点では 8.000 点を獲得し、喜田選手の持ち味である伸びやかな動きや表現を得点につなげることができた。

〈フープ〉

合計 27.900 点 (DB8.2/DA4.2/A7.6/E7.9)

前日と比較して身体の力強さがやや弱く、身体を十分に引き上げた状態で動き切れない場面が見られた。その影響もあり、バランスや身体難度の実施にもわずかな弱さが見られ、練習

では4回転まで実施できていたパンシェターンも3回転程度となった。
2つ目のリスクでは、投げたフープが天井にわずかに接触する場面があったが、その後の反応は早く、慌てることなく冷静に対応することができた。

細かな実施の乱れや危ない場面はあったものの、演技全体を通して落ち着いており、手具と身体を最後までコントロールしながら大きなミスなく演技をまとめることができた。

〈ボール〉

合計 23.750 点 (DB6.1/DA3.4/A7.4/E7.15/Pen0.30)

最終種目となったボールでは、前方からの投げで大きなミスが生じた。この技については、全身を引き上げ、正しい軌道を通してボールを前方へ送り出す必要があるが、投げる瞬間にやや身体の軸がぶれ、ボールを引っかけるような投げになったことが原因である。

これまでの試合でも同じ箇所ミスが出ていることから、偶発的なミスとして捉えるのではなく、投げの動作や身体の使い方を改めて分析し、どのような状況でも心身ともに安定して実施できる技術を身につけていく必要がある。

一方で、ミスが出た後も慌てることなく冷静に演技を立て直し、その後の技へ影響させず、最後まで自分をコントロールし演技をやり切ることができた。

身体難度のクオリティは、今シーズン当初と比較して大きく向上している。一方で、世界のレベルがさらに高まる中では、ローテーションをいかに最後まで回り切り、確実に難度として成立させるかが重要となる。また、喜田選手の持ち味である大きさや伸びやかさをさらに際立たせるためには、演技の中により明確なスピード感を加え、動きの緩急やダイナミックさを一層高めていく必要がある。

4種目を通して、細かな取りこぼしや課題は残ったものの、世界選手権という大舞台で最後まで冷静さを失わず、粘り強く演技をやり切ることができた。今回明確になった課題を今後の強化につなげ、喜田選手の持ち味である伸びやかさと力強さを、より確実に得点へつなげていきたい。

【鈴木菜巴】

3 種目合計 26 位

〈クラブ〉

合計 26.700 点 (DB8.0/DA3.5/A7.85/E7.35)

前日のボディウム練習では、会場特有の環境に対応しきれず、特に手具の受けに乱れが見られ、思うように演技をまとめられない場面があった。一方で、その経験から試合当日に確認すべきポイントを明確にし、落ち着いて準備を進めることができた。

世界選手権最初の種目となったクラブでは、直前まで確認を重ねていた冒頭の動きを丁寧に実施し、落ち着いた入りを見せた。最初のリスクではクラブが身体の近くに上がったものの、予定していた加点要素を落とすことなく実施。その後も一つひとつの技に積極的に挑み、脚受けを伴うリスクも成功させるなど、最後まで攻める姿勢を崩さず演技をまとめることができた。

大きなミスなく演技を終えたことに加え、DB8.000 点、芸術点 7.850 点を獲得した。世界選手権という緊張感のある舞台でも、これまで積み重ねてきた技術を臆することなく実施できたことは、次の種目につながる内容となった。

〈リボン〉

合計 26.250 点 (DB7.6/DA3.6/A7.6/E7.45)

2 種目目のリボンでは、静かな動き出しから集中して演技に入り、大きなミスなく最後までまとめることができた。

手具の受けの影響からリボンの描く図形が乱れる場面が見られたほか、これまで投げが短くなることでミスにつながるが多かったため、投げ受けにやや慎重さが見られる場面もあった。しかし、その都度状況を冷静に判断し、大きなミスへつなげることなく演技を継続することができた。

一方で、ラストのステップでは音楽の終末と動きの一致が十分ではなく、芸術面において改善すべき課題が残った。大きなミスを防ぐだけでなく、最後まで音楽と動きを一致させ、90 秒間を通して作品の完成度を高めることが、今後さらに得点を伸ばすために必要となる。

〈フープ〉

合計 26.700 点 (DB7.7/DA3.6/A7.6/E7.8)

前日は 23 時を過ぎて競技を終えるハードなスケジュールであったが、大きな疲労を残すことなく 2 日目を迎えた。限られた環境や時間の中でも、必要なポイントを整理しながら落ち着いて準備を進めることができた。

フープでは、これまでミスにつながることの多かったリスクを、準備動作から繰り返し確認してきたことを生かし、冷静に実施することができた。中盤の転がしでは一瞬乱れが生じ、続くリスクも予定した軌道とはならなかったが、的確に判断して対応し、その後の演技へ引きずることなく立て直した。

終盤は音楽の終末に対して時間的な余裕がなくなったものの、最後まで集中力を切らさず、大きなミスなく演技をまとめることができた。

〈ボール〉

合計 25.400 点 (DB5.9/DA3.8/A7.9/E7.8)

最終種目となったボールでは、本番直前まで手具と身体のタイミングが合わない場面も見られたが、これまで様々な状況の中で試合を経験してきたことを生かし、気持ちを切り替えて演技に臨んだ。

演技中には、ボールを両手で受ける場面やフロアライン際での実施など、細かな乱れや危ない場面が続き、難度を十分に得点へつなげることができなかった。一方で、そのような状況でも消極的になることなく、最後まで自分の演技を貫き、積極的に挑み続けた。

芸術点では 7.900 点を獲得した。技を実施するだけではなく、一つひとつの動きに自身の意思を持ち、最後まで作品を表現し切ろうとする姿勢が評価につながったと考える。

大学 4 年生で迎えた初めての世界選手権。目標としていた個人総合決勝進出には届かなかったが、怪我からの復帰後、思うような演技ができない時期にも課題から逃げることなく、一つひとつの技と向き合い続けてきた。

今大会では 4 種目を通して大きく崩れることなく、これまで積み重ねてきた技術と、最後まで挑み続ける強さを世界の舞台で示すことができた。今回得た経験と明確になった課題を、今後のさらなる成長につなげていきたい。

日本としては、両選手ともに目標としていた個人総合決勝への進出を果たすことができなかった。

今大会では、上位選手にもミスが相次ぎ、順位が大きく変動する展開となった。その中で、日本が世界の上位へ進出するためには、4 種目を通して大きなミスを出さないことはもちろん、身体難度や DA など一つひとつの要素で取りこぼすことなく、**持っている構成を確実に得点へつなげていくことが絶対条件となる。**

今シーズンは採点基準がより厳密となり、技の精度がこれまで以上に求められている。今回も、難度の不成立や細かな実施の乱れによる得点の取りこぼしが、そのまま最終的な順位に表れる結果となった。

世界のトップ選手であってもミスが起こる中、日本が中堅層から脱却し、世界の上位に食い込むためには、ミスを待つのではなく、自ら 4 種目を確実にまとめ、持っている構成価値を最後まで得点として残す力が必要となる。

そのためには、演技構成の価値を高めることに加え、身体難度ではローテーションの回転数

をさらに高め、最後まで正確に回り切る力を身につけること、DA では一つひとつの技のクオリティと確実性を高め、構成通りの価値を得点につなげることが必要である。また、リスクにおいても回転数を増やすことで難度価値を高めるとともに、投げから回転、受けまでをよりスピーディーかつダイナミックに実施し、演技全体のスピード感や迫力につなげていくことが求められる。

来年の世界選手権、そしてその先のロサンゼルスオリンピックを見据え、これらの技術的な底上げとともに、**国際舞台で4種目すべてを確実にやり切り、自分の持つ力を得点として残す力を身につけることが必須である。** 今大会で明確になった課題を今後の強化へ確実につなげ、世界の上位で戦える個人選手の育成に取り組んでいきたい。